

センターだより

保存版

特別号 VI②(2010)

平成22(2010)年10月19日発行

吹田市立教育センター

大阪府吹田市出口町2-1

TEL 06-6388-1455



『若手教職員に今、伝えたい！ 吹田のスーパーティーチャーの実践・技』

今回の特別号は、昨年度に引き続き、吹田市のスーパーティーチャーの指導教諭の先生方の実践紹介です。

皆さんは、吹田市にこんなにたくさんのすばらしい指導教諭の皆さんがおられることをご存じでしたか？今年度は、小学校13名、中学校10名、計23名の指導教諭の方々が、吹田市の教育センターの研修等で活躍されています。それらの先生方を教育センターだより特別号でこれから数回に分けて紹介していきます。それぞれの先生方のご活躍の分野も併せて紹介します。各学校での研修等でもご相談に乗って頂けるとと思います。



今回は、特別支援教育・生徒指導・英語教育・体育教育の分野で活躍して頂いている指導教諭の方々の実践や若手教職員へのメッセージを紹介致します。

学校名	名前	活躍分野
山田第二小学校	江端 悦子	特別支援教育
片山小学校	有森 清美	算数教育
青山台小学校	川向 博子	特別支援教育
高野台小学校	福島 太三	体育教育
吹田第三小学校	辻本 裕子	特別支援教育
吹田第三小学校	後藤 明弘	音楽教育
千里新田小学校	江下 毅	生徒指導
千里第一小学校	田淵 久美子	児童文化
山田第五小学校	篠田 美千子	小学校外国語活動
北山田小学校	石丸 弘美	図工教育
青山台小学校	杉田 勝美	算数少人数指導
千里たけみ小学校	郷 文子	小中一貫教育
千里たけみ小学校	森田 安徳	特別支援教育

学校名	名前	活躍分野
第五中学校	石井 佳代子	英語教育
豊津中学校	山口 正剛	特別支援教育
西山田中学校	野本 玲子	道德教育
第六中学校	永井 隆	特別支援教育
竹見台中学校	森崎 明	生徒指導
山田中学校	神崎 由紀	英語教育
山田東中学校	吉田 昌司	国際理解教育
高野台中学校	榊 貴恵	音楽教育
南千里中学校	池田 愛	国際理解教育
千里丘中学校	平岡 弘子	国語教育



高野台小学校 福島先生

こんな素敵な先生です！

とても、研究熱心な福島先生。放課後おじゃました理科室では、翌日の理科実験の準備をされていました。「体育でも理科でも夢中になってしまう学習内容・方法(ネタ)を作り出すこと」「子どもの実態から出発すること」ことを常に大切にされ、教材研究・準備には余念がありません。あふれるほどの今までの財産がありながら、そこに甘んじることなく常に新しい情報を取り入れ、今、目の前にいる子どもたちを見つめ、常によりよい指導方法を考えだそうと努力されている姿に感動しました。先生のお宝グッズからは、個々の運動での具体的な子どもの姿とその支援方法について書かれた手書きの絵カードがぞくぞくと出てきました。ここに福島先生のスーパーティーチャーである秘密があるのだと感じました。

- 何となく指導するのではなく、こう指導すれば、こうなる。こう変わるといえることを見つけることが大切
- 教材研究の九割は趣味の世界
- 自分かおもしろい、楽しいと思わないことは、子どもも思わない。また、自分がおもしろい、楽しいと思うことで、子どもがそう思うとは限らない
- 研究授業を見たら、2つの疑問、1つの批判。研究会では必ず発言する
といわれた言葉が心に残りました。

若手教職員に、今、伝えたい！ スーパーティーチャーからのメッセージ

「よい授業をめざしましょう」

小学校の体育科には、「良い授業の四つの条件」というのがあります。

- ① 子ども達がいっしょうけんめい運動していましたか。
- ② 子ども達の力や技に伸びがありましたか。
- ③ 子ども達が何かわかったということがありましたか。
- ④ 子ども達が互いに協力していましたか。

これらの条件を満たすような授業をするには、教材研究を深めることと指導技術を豊かにすることが大切です。子ども達の技能を向上させるためには、技や技術の系統や運動の仕組みについての知識が必要で、それらは、研修や教育図書を参考にすることができます。

子どもが夢中になって取り組めるようにするには、単元や1時間の授業の中での、教師の「しかけ」が必要となります。指導の上手な先生と言うのは、教師のねらいを達成させるために、子どもにめあてを持たせて意欲的に活動させているのです。「Aを教えたいならBをさせよ」といわれるとおろ、教師のねらいと子どものめあては同じとは限りません。指導技術は、すばらしい授業をたくさん見ることによってのみ、身に付けることができます。

出張には、しょっちゅう行きましょう。

千里新田小学校 江下先生

こんな素敵な先生です！

吹田市の教職員年齢構成で、一番少ない世代に属される江下先生。新任だったころ、周りは大先輩ばかり・・

最初の勤務校では、ずっと一番年下というポジションで、大先輩に両腕を抱えられながら、たくさんのことを学ばせてもらいました・・と語られる江下先生。今、学校で頼れる兄貴分として活躍されています。

「なあなあ、今日こんなことあってん。どうしたらええやろ？」と何でも話すようにしています。職員室のムードづくりが僕の仕事かな・・という江下先生の言葉が印象に残りました。

生徒指導担当をしたことで、組織的にものごとを見ることやケース会議などでの対応の仕方を学べたことができたことが今の自分にプラスになっています。学校は、**教師の人間関係づくりから始まる**と語られる江下先生。子どもにも大人にも温かい心で接してくださる先生です。

若手教職員に、今、伝えたい！ スーパーティーチャーからのメッセージ

「小学校の生活指導ってなんだろう？」

先生同士しゃべっていますか？
子どもの話を学年や学校でしていますか？

「自分の子どもの見方が本当に正しいんだろうか？」と思ったことはありませんか？小学校では、担任と児童の時間がそこはかたく多い。子どもはひとりひとりが生活を抱えてがんばっている。さまざまな形で、気持ちを表したり、SOSを出したりしていますよね。そのとらえ方を間違ってしまうと、問題行動に発展したり・・・ってことも考えられます。そんな時に頼りになるのは、「他の先生の子どもの見方」だと思のです。「私はこう思うけど・・・」「僕はこう思うからこうしてみたら？」などなど、日ごろからそんなことを言い合え、聞き合える関係にあること・・・こんな関係を作っていくこと。これが生活指導の第1歩ではないでしょうか？まさに教師の集団作りですね。そして子どものことをたくさん話したことが、また違う子どもに活きたり、次の指導の参考になったりして、教師としての幅が広がっていくのではないのでしょうか？

そんな生活指導を目指したい。いつもそう思っています。

みんなで明るく、しゃべりませんか？

第五中学校 永井先生

こんな素敵な先生です！

永井先生は、大学の時に手話に興味をもたれ、手話ボランティアの資格を得られました。その後、いろいろな会議等に参加され成人聾の方とのつながりをもたれたことが、難聴の子どもたちへの指導のきっかけだったそうです。

吹田市の中学校に難聴学級が設置されることになった時から、難聴学級の指導者として関わられてこられました。14年間の第六中での難聴学級を指導されている間に2年間、兵庫教育大学へ内地留学をされ、障がい児教育について専門的に学ばれました。その後、市教育委員会・府教育委員会指導主事という行政経験や教頭職もご経験され、今、再び指導教諭として第六中学校で吹田市の難聴学級センター校での指導に当たっておられます。

社会・国語・英語という三教科の教員免許を持っておられることも難聴学級担当者としては強みになったそうです。「最初の頃は、子どもたちは手話を知らなかったので、困りました」と経験を語っていただきました。

「長い指導経験の中で、たくさんの人との出会いが今の財産になっています。」という言葉が印象的でした。

若手教職員に、今、伝えたい！スーパーティーチャーからのメッセージ

自分の長所(個性)を活かして、自然体で！ —好きこそものの上手なれ—

私は、難聴学級を担当させていただき18年になります。学生時代、手話と出会い、それがきっかけで、聞こえにくさのある生徒たちと出会い、共に学ばせていただいたことは、やりがいのある仕事をさせていただけたと感謝しています。みなさんもご自身の長所(個性)を活かしてください。

■自分の授業を年に一度はビデオに撮ってみては！

時々ビデオで授業を録画すると、自分の話し方(早口だなあ、発問が多すぎるなあ、一問一答の発問だなあ、しゃべりすぎだな)など自分のくせがわかります。自分の授業を客観的にみることができます。授業改善にもつながると思います。

■学び合いの授業を！

どんな形態の授業でも、子どもたち同士の学び合い、教え合いの場面をできるだけ設定してください。子どもたちの、主体的な学びが育つ工夫を試みてください。

■社会人としてのマナーを身につけましょう！

教師も一人の社会人です。「あいさつや電話のマナー」「みだしなみ」「ことば使い」「事務文書や手紙の書き方」など常に謙虚な気持ちで学ぶ姿勢を忘れずに成長しましょう。

第五中学校 石井先生

こんな素敵な先生です！

石井先生の授業づくりのベースは、「子どもとつながること」。授業は子どもと一緒に作りあげるものだから、子どもとの信頼関係なしには授業は成立しないと語られます。

そして、子どもの前に立つ前に心がけているのは、「笑顔でいること」。どんなに気持ちが落ち込んでいる時でも、教室に入る前には、笑顔を作ってから入るそうです。

- 授業づくりで大切にしていることは
- 約束は最初に(授業を荒れさせない)
 - 授業中一度も発言出来なかった子どもはいなかったらうか・・常に振り返ること
 - いつも I(私)メッセージで
 - 子どもが人として大切にされてこそ学びの場

子どもを一人の人間として尊重し、人間関係を築くことを大切にされている石井先生、お話を聞かせて頂いていると心がほんわかあったかくなるのを感じました。

若手教職員に、今、伝えたい！スーパーティーチャーからのメッセージ

😊 授業をたくさん見せてもらおう。

そして自分も工夫しよう！

子どもたちは先生のことをよく見ています。「英語の歌もっと聞きたい。」「単語テストがんばりたい。」「スラスラ読みクリアした！」「1ページ丸ごと暗唱できてうれしい。」「英語むずかしいけど、楽しいから好き！」子どもたちが達成感を味わえる授業を目指して、皆さんと一緒に私自身もがんばっていきたいです。授業のアイデア、情報交換しましょう。

😊 「やるしかない」…

でも何事も前向きに考えていいんだよ！

今シーズン、この言葉を野球帽の裏に書いてがんばっていた選手がいます。仕事をしていると、いろんな意味で理想と現実のギャップに悩むことがあると思います。人から見れば…今にして思えば…何気ないことでも、その時の自分にとっては深刻なことです。つい最近、職場の若い同僚に教えてもらった言葉です。しんどい時にちょっと思い出してみてください。

青山台小学校 川向先生

こんな素敵な先生です！

幼小交流・支援学級担任・特別支援教育コーディネーターなどの経験を生かし、現在通級指導教室担任をされている川向先生。巡回コーディネーターとしても各学校の特別支援教育へのサポートをして頂いています。

若い頃は、学研図工部に所属され、「表現することが楽しい授業・達成感ある授業」をつくることにこだわり研究されていたそうです。その力を生かしていただき、教育センターのステップアップ研修等で図工の研修講師としても活躍して頂いています。

また、人事交流で3年間幼稚園で勤務されました。その時に発達軸で子どもを見ること、子どもの目線でものを捉え、子どもの興味関心から保育をスタートすること、環境を整えることの大切さ等を学ばれたそうです。そのことが、今特別支援教育に関わられるきっかけを担っていると思います。・と語ってくださいました。

今、若手教職員に、今、伝えたい！

スーパーティチャーからのメッセージ

人は、誰も得意なこと不得意なことがあります。私は、順序だてて考えることや二つのことをバランスよくこなすことがどうも苦手です。ですから、授業となるとすすめることに必死で、子どもの姿がみえていないことがありました。そして、初めて補助者として教室の後ろから子どもを眺めた時、子どもの背中が「おもしろっ」「たいくつやなあ〜」と色々語っているのに気づき、衝撃が走りました。「**視点を変えて子どもをみる大切さ**」を子どもから学びました。

視点の転換は、自分の振り返りや子ども理解に大いに役立ちます。子どもの視点から授業を振り返ると、意外と子どもの活動量が少ないことに気づいたり、気になる子どもの行動も困り感の表れと捉えられたりします。そして、子どもを通して自分もみえてきます。教師もまた、自己理解をすすめ、人として子どもとともに向上していきたいという姿勢を持ち続けることが大切だと思います。

今、学校は大きな転換期です。「特別支援教育」は、教育の根幹を見つめなおすことでもあると思います。若い先生方には、関心を持って「特別支援教育」を学び、日々の授業や学校生活に生かしてほしいと思います。

豊津中学校 山口先生

こんな素敵な先生です！

通級指導教室の担当をされ、また、巡回コーディネーターとして各学校の巡回相談をいただいている山口先生。通級教室担当として9年目。当時は、中学校の通級指導教室は、大阪府下でも6教室しかなく、モデルとして創り上げていく状況からのスタートで、工夫されながら取り組んでこられました。

特別支援教育に関わられるきっかけとなったのは、養護学級の担任をして、発達障がいを知り、より深く学びたいと思い京都教育大に内地留学をしたこと。その後も各地の研修会に参加し、たくさんの方を学ばれている、とても研究熱心な先生です。頼りがいのあるアドバイザーとしての山口先生の秘密がここにあるのだと感じました。

年々特別支援教育のニーズが高まる中、1教室しかない中学校での通級教室での指導は、とても多忙です。午後からの時間割はびっしりつまった中で、午前中は各学校を回る・・・といった状態で、なかなか勤務校にじっくりいる時間がない山口先生です。

若手教職員に、今、伝えたい！

スーパーティチャーからのメッセージ

私が教師になりたてのころ（採用試験にはまだ合格していなくて講師をしていたころ）、高校時代の恩師からこんなことを言われました。私が、「早く一人前の教師になりたいです。」と言うと、その方はこんなふうに返されました。「早くも遅くも、一人前になってはいけないのがこの仕事だと思います。」と。当時、すぐにはその意味がわかりませんでした。一般に一人前とは「技芸・学問などが一応の水準に達していること」をいいますが、「一応の水準に達したと思いきや安心してはいけません。常に自己を振り返り点検し高める努力をしなければならない。」とその方は言いたかったのだと現在では確信しています。

仕事ができるようになり自信を持つのはいい。しかし、満足にひたりきってはいけません。慢心は厳禁です。いつも自分を振り返り、しっかりできたか、これでいいのか、改善すべきところはないか、と点検する。子どもたちにわかりやすい授業ができたか、もっとわかりやすい教え方はないか、いい社会人に導くことができているか、思いやりの気持ちを持たせることができたか、などなど挙げればきりがありません。これからも、ひとつひとつ丁寧に確認していきたいです。

**目指せ一人前！ではなく、
目指し続けろ一人前！！**